

関係づくりを最優先とした 行動問題への指導支援

～連携と環境調整を通じた児童の変容と大人の関わり～



茨城県久慈郡
大子町立だいが小学校
中村 玲子



茨城県久慈郡大子町

- 中学校… 1 校
- 小学校… 6 校



大子町立だいご小学校



教育目標 つよく おおきく たくましく

R8	全校児童数	1	78名
	1年生	2	5名
	2年生	2	9名
	3年生	2	8名
	4年生	2	4名
	5年生	4	0名
	6年生	3	2名

内		
知的障害特別支援学級	1学級	7名
自閉症・情緒障害特別支援学級		
	1学級	7名
巡回型通級指導教室		5名
		含む



令和8年度より実施

町内の通級指導教室対象児童・生徒10名の児童（中学校1校小学校3校）を中学校通級指導教室担当が指導している。

I 実践にあたって

校内で実際に起きていた行動問題

学習活動への不参加

例：徘徊・トイレや外で遊ぶ・工作

授業妨害

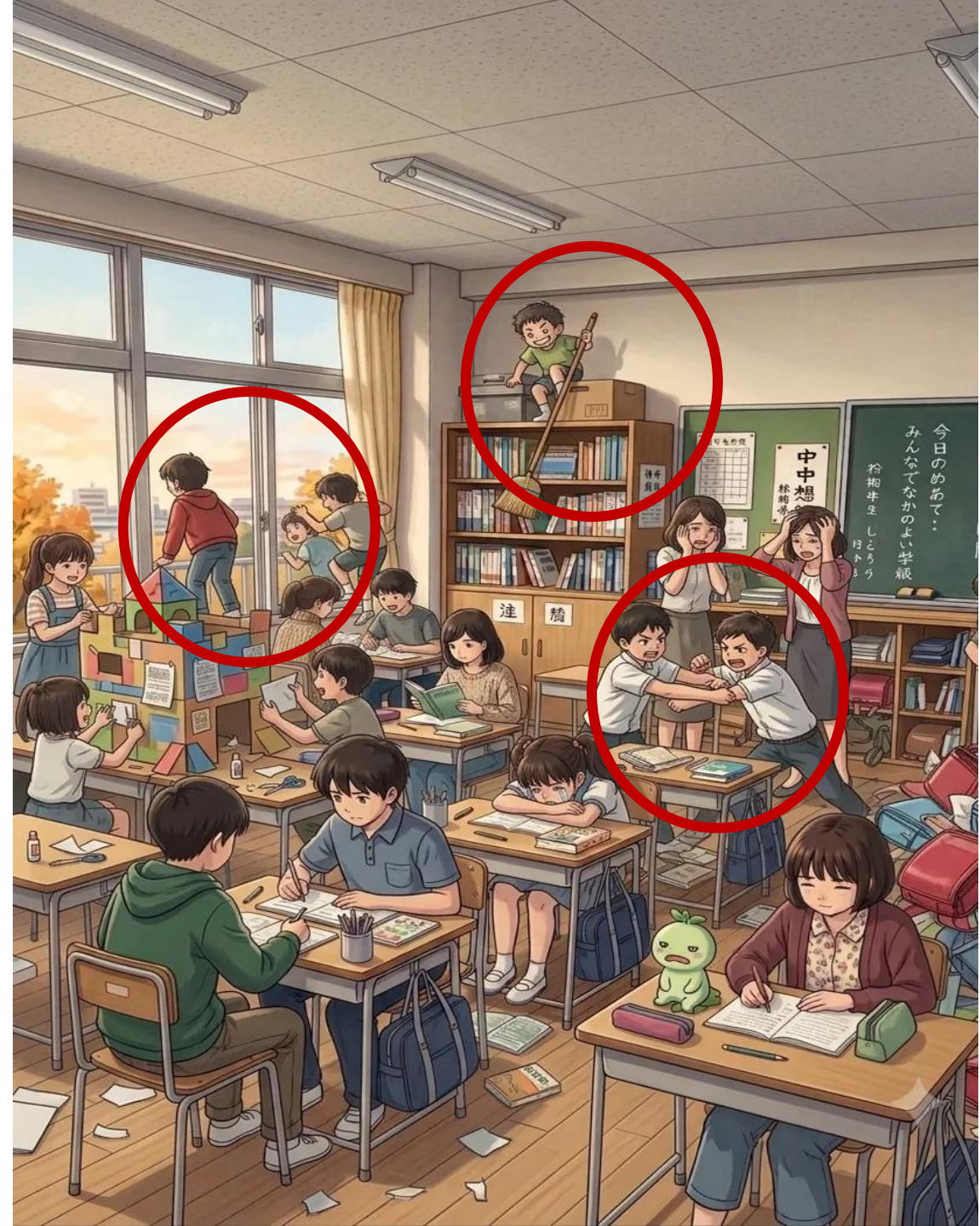
例：大声で話す・奇声・騒音をだす
暴力・暴言

例：教師への反抗 物を投げる
破壊行為・備品の持ち出し

例：三角コーンを蹴って割る
理科室の実験道具を持ち出す

危険行為

例：ベランダの淵に立つ
刃物や針を使って遊ぶ
フェンスや屋根に乗る



校内で実際に起きていた行動問題

学習活動への不参加

例：徘徊・トイレや外で遊ぶ・工作

授業妨害

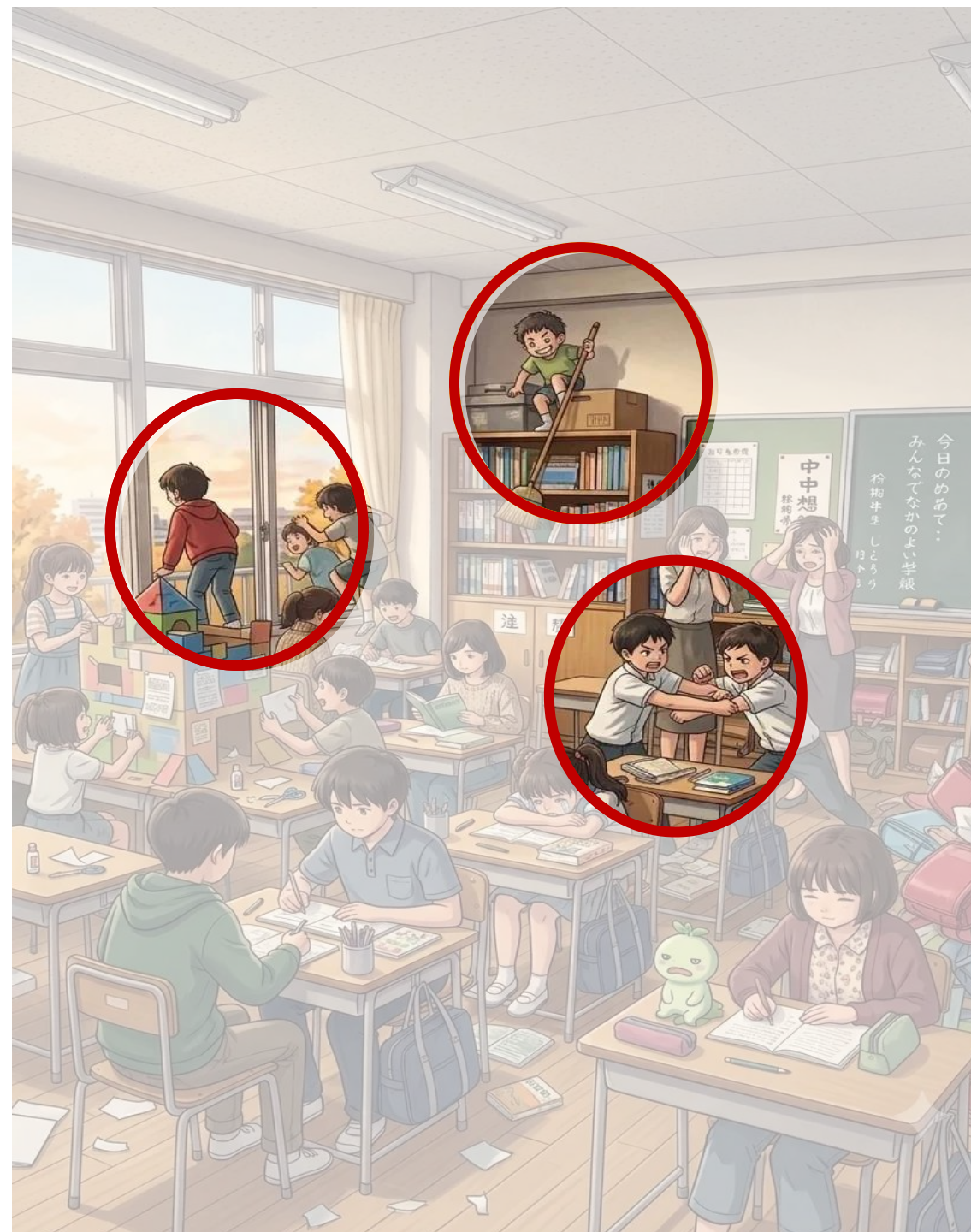
例：大声で話す・奇声・騒音をだす
暴力・暴言

例：教師への反抗 物を投げる
破壊行為・備品の持ち出し

例：三角コーンを蹴って割る
理科室の実験道具を持ち出す

危険行為

例：ベランダの淵に立つ
刃物や針を使って遊ぶ
フェンスや屋根に乗る



Ⅱ 実践内容

Ⅱ-Ⅰ 環境調整と校内支援体制の整備

少人数指導体制



利用可能教室の活用

刺激のコントロール



掲示物の精選・座席配置の工夫
クールダウンスペースの確保

連携＆複数対応



Googleチャット機能を活用して
情報交換

その他：学校公開（いつでも授業参観、学習活動や清掃の手伝い）

Ⅱ-2 専門機関連携と校内研修の充実

行動の背景として見えてきた要因



Ⅱ-2 校内研修の充実

巡回相談事業の活用

「制止や禁止」といった毅然とした指導
→児童の思考や選択を促す言葉掛け



特別支援教育専門家派遣事業による校内研修

令和7年度

「『適切な学びの場』の検討に段階的に至るプロセス」から考える通常学級での特別支援教育の充実」

(桜美林大学リベラルアーツ学群准教授 前茨城キリスト教大学文学部
児童教育学科准教授)

斎藤 遼太郎 氏

「DCD（発達性協調運動障害）ってなに」

東京家政大学健康科学部リハビリテーション学科講師

東恩納 拓也 氏

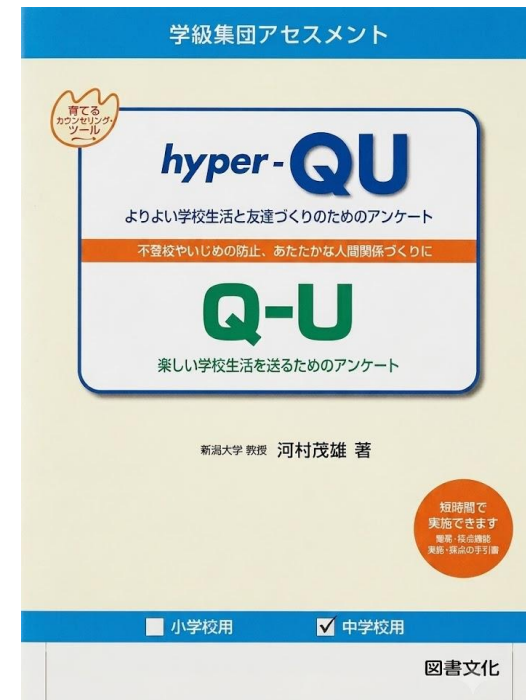
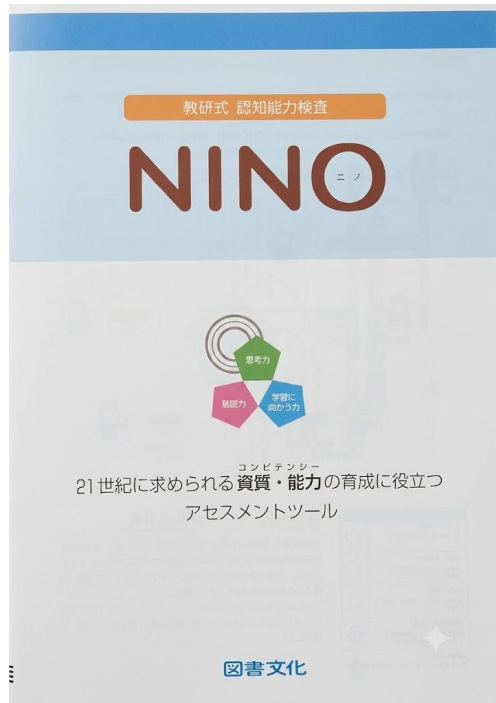
令和8年度

「NINO 認知能力検査）を活用したUD授業について」

一般財団法人応用教育研究所係長 黒沢 奈生子 氏

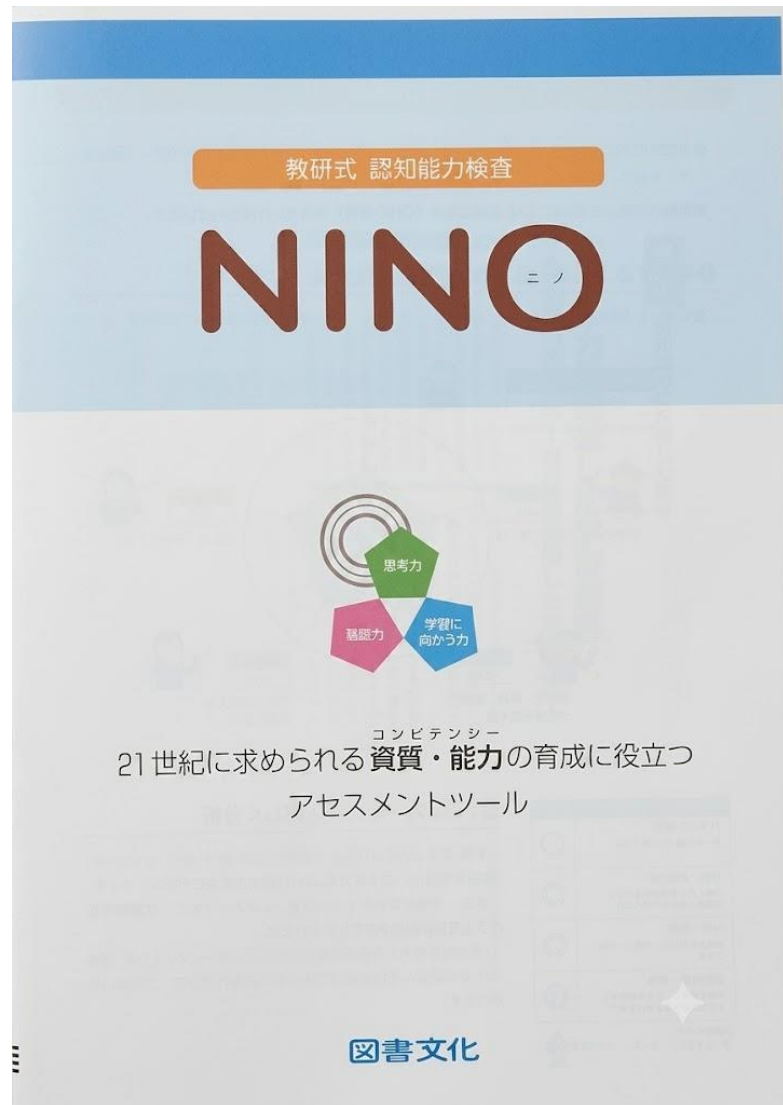
→行動問題の捉え方、子どもと
の関わり方を大人が変える

Ⅱ-3 行動問題予防のための実態把握のシステム化



UD授業（授業のユニバーサルデザイン）つまり、教員の工夫でバリアを取り除くために、児童が何につまづいているのか、何が得意なのか知ることからスタート

Ⅱ-3 行動問題予防のための実態把握のシステム化

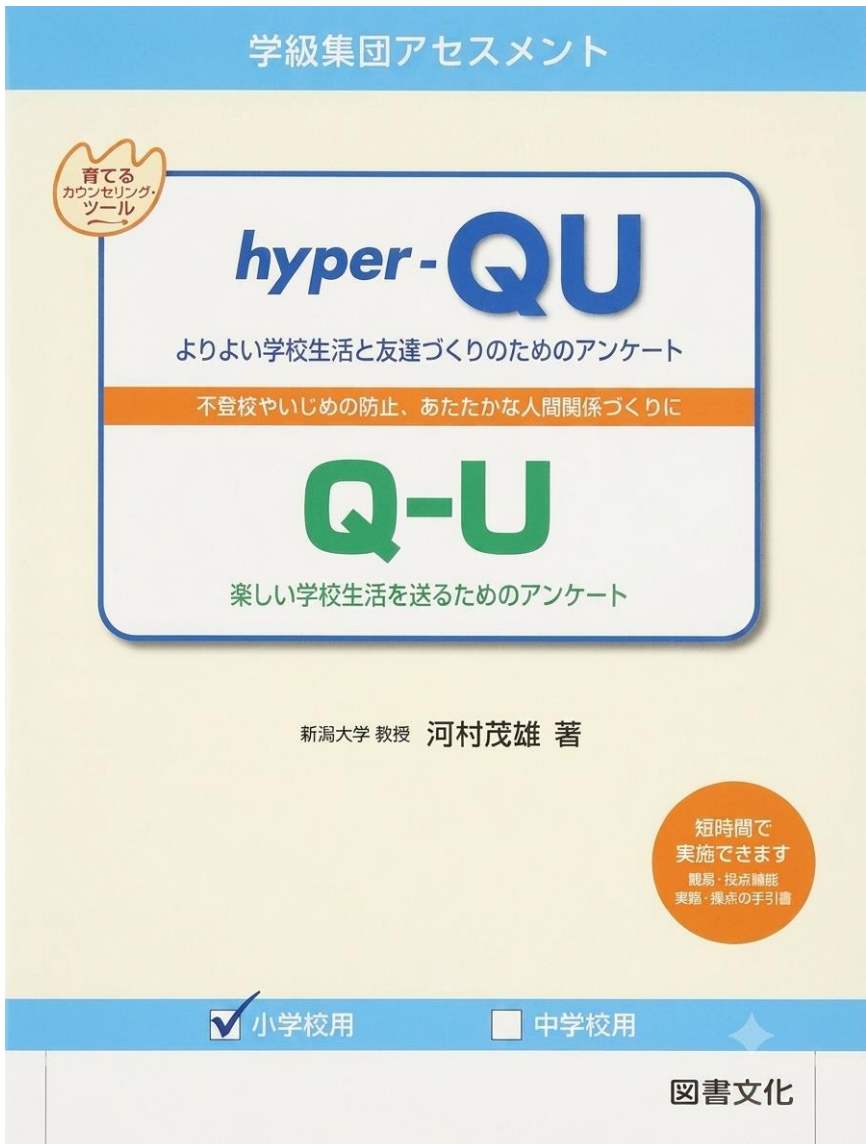


教研式認知能力検査 NINO

児童一人ひとりの「得意な認知特性」がスコア化されるため、授業での効果的な個別の指導計画（つまずきの要因に応じたアプローチ）の作成に直接生かすことができる。

Ⅱ-3 行動問題予防のための実態把握のシステム化

学級集団アセスメント「hyper-QU」



学級の「状態」が4つのタイプに分けられ学級がどのような集団状態にあるかが一目で分かる。

満足型：理想的な状態

管理型：ルールは守られているが、子供たちの承認感が低い。

馴れ合い型：仲は良いが、決まりや目標に向けた緊張感がない。

冷淡型：承認感も低く、ルールも崩れている。

Ⅱ-4 特性に応じた支援の充実を図るための授業改善

処理速度がゆっくりな児童が多いから、板書は少なめしよう



つまづきやすい算数は、可能な範囲で複数の教員で対応しよう。
下学年の内容を復習できるようプリントを作っておこう

認知能力が低い児童が多いなあ…
基礎基本の学習を中心に学習をしよう

座席配置を前や隅にして、先生と話しやすくしよう。
課題量を調整して無理なく取り組めるようにすることからはじめよう

Ⅲ 成果と今後の課題

ⅢーⅠ 実践の成果

令和7年度実施 校内研修会事後アンケート(7月実施 回答15名)

○教室の中で個別の配慮をした対応を、タイムリーに提供できる準備。

教師としてのこだわりを考え直す。

○大人のとらえ方・考え方を改善していかなければ・・・と思いました。指導することもですが支援することが必要かなと感じます。求めることばかりでは難しい子供たちが多い。

○現在高学年で学習活動に参加できない児童は、このような背景があったかもしれない。色々な苦手なことがあっていい、苦手なりに参加できるような学級経営、集団作りをしたい。

令和7年度実施 校内研究授業事後アンケート(11月実施 回答11名)

○客観的に児童の様子が把握できたことで、実態に合わせた板書について工夫できた。

○指導案にNINOの結果による実態や、それに対する手立てを明記したことで意識して授業づくりができた

○今までどうして伝わらないんだろうと悩んだ時期もあったが、NINOをきっかけにどのように伝えればよいかさらに工夫し、児童理解を深めていきたい。

○結果の解釈や学級経営・学習活動にいかすために更に研修をしたい。

児童の実態に合った授業をつくりたい。

「どうしてできないんだろう」

「どうすれば伝わるんだろう」

という視点をもてた。

行動の背景にあるものは？と想像することで、言葉掛けが変わる。

⇒児童たちの反応や行動が変わる。

Ⅲ－２ 今後の課題と展望

低学年からのアセスメント

→家庭・専門機関との連携

→特性に応じた配慮

→苦手を代替手段で補う力を育てる

- NINOは2学年から実施。1学年から客観的な実態把握をして特性を知りたい。
- 教師の観察によるアセスメント力の向上
- 低学年の間は、保護者も認識が難しい。どのように連携を図ればよいか。
- 保幼小連携の充実

主体的に学べるUD授業

→安心して学習できる環境作り

- NINOやQUの結果を誰でも安心して過ごせる学級経営や授業改善を目指す
- 結果分析をして、正確に実態を把握し、適切な手立てを考える
- 指示の出し方、ICTの活用など、教師の指導力向上を目指す

早期アセスメントを行い、「わかる・できる」授業づくり
⇒全ての児童が自己肯定感をもち、安心して学べる学校づくりを目指す。



ご清聴ありがとうございました

イラスト：チャットGPT・Gemini・notebookLMにより作成